

P07

口の中から発達支援 くまもとメソッド

吉良直子

熊本市中央保健福祉センター

[目的] 当保健福祉センターで「ペロタッチ」という舌の刺激を行うことで、「食べない」「極端な偏食がある」などの子どもを持つ母親の不安が軽減した事例を経験したので報告する。

[方法] 頬をマッサージして子どもをリラックスさせ、唇を横に広げる（お口びよ〜ん）方法と、歯磨きをした後、舌の先、両側を歯ブラシのブラシの部分でタッチする（ペロタッチ）方法を行った。

[結果] 障害を持つ子どもや発達に不安のある子どもの舌がよく動くようになり、「発語、言葉に改善が認められた。」「極端な偏食がなくなった。」「母親の表情が明るくなった。」「子どものかんしゃくが減った。」などの事例を経験した。

[考察] ペロタッチを中心とした本法は保護者の負担が少なく、舌の動きの変化を母親が可視できるため継続率が高いと推測された。子どもの発達を確認できると母親が明るくなり言葉かけも増加する傾向にある。言葉の発達はこのような母親の関わり方の変化によるもの、あるいは発達の時期がたまたま来たものなど他の要因も多く考えられるものの、参加者や地域保健師の高い評価を得ている。この事業を通して3歳児以下の子どもの保護者は「かむこと」「話すこと」に高い関心があることを報告するとともに、今後は事例を重ねて効果の検証を図る予定である。ペロタッチを柱とした熊本メソッドは、『発達障害児の口腔の過敏対策』として、小児保健研究会での発表など、発達小児科医等との連携を図り、地域への普及を目指している。

P08

当科における多職種連携による障害児の
摂食・嚥下リハビリテーションの取り組み

○ 佐藤秀夫¹⁾, 北上真由美^{1,2)}, 長谷川大子¹⁾
金城幸子^{1,3)}, 下田平貴子²⁾, 山崎要一¹⁾

- 1) 鹿大 院医歯 小児歯
- 2) 鹿大病 臨技術 歯衛生
- 3) きんじょう歯科小児歯科

障害児が摂食・嚥下障害により窒息や誤嚥性肺炎、栄養不良に陥るケースが多く見受けられる。そのため、摂食・嚥下リハビリテーションに対する取り組みが求められている。

他方で、障害児は、療育、福祉、教育と関わることが多く、摂食・嚥下リハビリテーションを円滑に進めるために、家庭を含めた多職種との連携が不可欠である。

当科では障害児の摂食・嚥下障害支援を目的とした「もぐもぐ外来」を昨年開設した。障害児の摂食・嚥下障害は原疾患への対応が求められる一方で食形態、食事時の姿勢、食事時の雰囲気によって左右されることが多く、各施設により対応がまちまちである。当科では保護者から患児の生活状況の聞き取り、関連職種との連携を図るよう取り組んでいる。

一例として、摂食・嚥下リハビリテーションの指導や口腔ケアの内容を記載した「もぐもぐステップアップノート」を配布し、保護者や各施設の職員に周知することで、リハビリテーションおよび食環境の標準化を図る一方で、各施設、家庭での食事時の様子を記載してもらうことで、リハビリテーションの指導内容に反映させている。また、福祉関係者や特別支援学校教諭が患児、保護者とともに来院し、リハビリテーションや口腔ケアの内容を実際に確認してもらう。一方で当科から担当者が特別支援学校へ赴き、給食に立ち会って、普段の食事の様子を観察して、担当教諭と摂食方法の相談、指導を行っている。今後はさらに緊密な多職種連携の方法を模索し、患児のQOLが向上するように努めていく。